

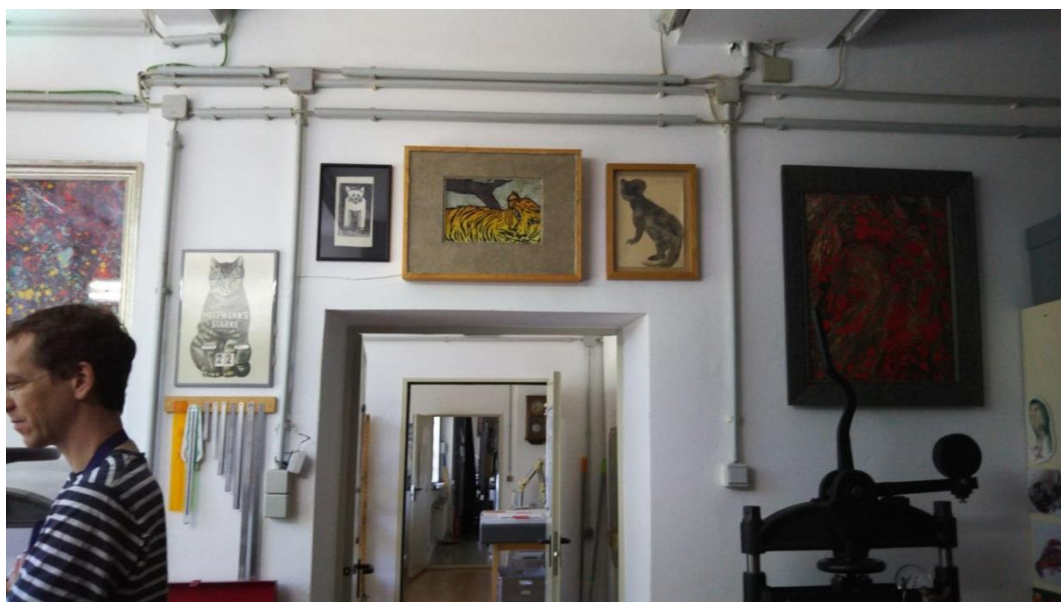
ドイツベルリン 資料保存会社を訪ねる。2018年5月23日

NPO法人書物の歴史と保存修復に関する研究会 代表理事 板倉正子

友人のパピルス修復家 Myriam さんの紹介でベルリンにある本と紙の修復専門会社を見学させていただく。



玄関 <サイトから拝借>



縦長の社屋は各セクションごとに分かれている。真ん中の部屋は、本の修復の出来上がりをチェックする部署で、ネコ好きのサビーネさんの作業場となっている。新しい見返し紙が白すぎないか、補彩がきつすぎないか、等のチェックを、修復担当であるクリスチャン氏ではなく、別の人の目を見てチェックするシステムを取っている。



←製本修復担当クリスチャン氏



↑ 道具のキャビネット（フィレ・花車＝表紙に金で模様を付ける道具）



↑ 道具のキャビネット（型押し）



↑ 紙類のキャビネット（見返しや表紙などに使う様々な種類の紙）



↑ ドライクリーニングや薬剤を使用する時のチェンバー



↑ 製本修復師（左）とミリアム女史



↑ 革の染見本帳（無染めの白革を用途に合わせて染める）



↑ プレスする道具（プレスベンゲル）



←：活字の抽斗

背にタイトルを押す道具：→



↓：作業中の本



クロス類のストック





大判ポスターの裏打ち作業・後の機械は大型プレス：裏打ち後3，4回紙を替え30分ずつプレスし、後は一か月プレスしたまま乾燥させる。

サイトからの情報によると、創業は1993年で、当時は製本修復と一枚物資料の修復のみであったが、2000年からは写真の修復も手掛けるようになったとのこと。職員は6名、顧客は大学図書館、美術館などに加え、一般のコレクターなどからの依頼もあるという。

「難しいのは、1800年代より後の、むしろ新しい書物の修復です。」とは、クリスチャン氏の見解ですが、同じ仕事をする私たちも全く同意見である。近・現代の書籍は様式、素材ともに多様になりすぎ、手におえない場合が多々あり、「修復家泣かせ」なのだ。

一般的に「修復家」と言われる人たちは個人で仕事をするか、または、図書館や美術館などで勤務する形が多く、上記のような専門会社はドイツでも珍しいとのことである。小規模ながらも一渡りの設備を整え、事業として成り立っている点はうらやましい限りである。

当初はエジプト博物館の修復室を見学させていただく予定であったが、職員の方が3名病欠とのことで、Myriamさんが知り合いを通じて、急遽見学の手配を取って下さり、見学が実現した。

Myriamさんと、快く見学させていただいた、Claus schadeの方々に心より感謝を申し上げます。

www.claus-schade.de